UN FILM DE SERGE GAINSBOURG

"stan the flasher"

scénario, dialogues, musique et mise en scène de **GAINSBOURG.**

Claude BERRI. Aurore CLEMENT. Richard BOHRINGER. Elodie BOUCHEZ. Lucie CABANIS. Daniel DUVAL. Michel ROBIN

1989/France/couleur/1.85/70min. distribué par N.S.W.

スタン・ザ・フラッシャー

ロードショーに先駆けて、プレミア上映決定！

監督・脚本・音楽／セルジュ・ゲンスブール
出演／クロード・ベリ／オーロール・クレマン／リシャール・ボーランジェ／エロディ・ブシェーズ
1989年／フランス映画／カラー／1.85／70分／配給：N. S. W.

「ダーティ・オールドマンのイノセンス」

川勝正幸

『スタン・ザ・フラッシャー』を観終わったあと、しばらく席を立てなかった。「フレンチ・ロリータの名調教師であるゲンスブールの遺作」で「放課後の女学生たちを狙う露出狂男（フラッシャー）の話」という情報から 想像をたくましくしていたものとは、かなり違っていたからだ。

主人公のスタンは売れないシナリオを書きながら、生活のために英語の家庭教師をやっている50代のオヤジ。ハゲデブチビの三重苦どころか、インポテンツ。そう。ゲンスブールのようにダンディじゃない。彼が輝くのは、教え子のナターシャたちの前でレインコートの下の裸を見せる瞬間を妄想する時。残念？実際に行為をするわけではないのだ。スタンがやったことといえば、ナターシャの身体を撫でただけ。それでも彼女の父親にボコボコにされ、刑務所へ。家に帰れば、長年連れ添った妻オーロールから「さよなら」の置き手紙。そして、スタンはピストルを手に取る。

20代は根本敬の漫画を読む如く「味のあるオヤジもの」として楽しめるだろう。50代ならスタンの行動が身につまされるに違いない。

今年ボリス・ヴィアンの享年になって、『ジュ・テーム・モワ・ノン・プリュ』のテーマ(＝肉体の愛に出口なし)が分かった奥手の僕は、クールとリアル――両極の観方の間で揺れている。ただ、あれほど深い絶望を描きながら、最後に希望を残す映画を作ってしまう。無垢（イノセンス）さを隠せなかったゲンスブールがますます好きになったことだけは、はっきり言えるのだ。

「絶望と快感の極致！」

永瀧達治

ゲンスブールがフラッシャー！（露出狂）としての自分を意図的な遺作として残したのではないだろうか…再度、この映画を見てそんなことを考えた。もちろん、フラッシャーとはシンボライズされた精神だ。そこにはもはや前作『シャルロット・フォー・エヴァー』のように計算された露悪趣味のナルシシズムはない。彼の自虐性が怪優(！)クロード・ベリによって何十倍もの効果を上げている。敢えて、このように自分を描くゲンスブールの絶望は強烈な伝染力を持つ。映画を見た後、銃を手渡されたなら僕はスタンへの共感で銃口をこめかみに当てているだろう。

彼は今までにも歌や映画や小説の中に、ある特定の相手にしか分からないメッセージや暗号を潜ませていた。「夫婦の会話」はバーキンと交わされた言葉？「ナターシャ」とは誰？音楽界の栄光は単なる「ガキ相手の家庭教師」？残された夢は純文学？

美少女ナターシャの存在を除いて、この映画は全編、これでもか、これでもかというネガティブな構成で貫かれている。ルイ・マル監督の名作『鬼火』以来の超厭世的映画。しかし、見終わった後、立ち直れないほどに暗く沈んだ感情が、時間をかけてゆっくりと、ある種の快感に変化する。それは、この物語がゲンスブール自身のように、あまりに純粋で哀しく美しい精神に包まれているからだ。

作品の真価が認められるのは、さらに5年西暦2000年を待たねばならない…。なぜなら、この作品は徹底した『反』映画の手法を使っているから。ユイスマンスやギュスターブ・モロオの如く、彼もまたまた世紀末の呪われた芸術家なのだ。この映画を見たあなたは、もうゲンスブールの絶望から逃げられない！後は快感への熟成を待て！…

「聖なるフレンチ・ロリータの解剖図」

サエキけんぞう

ゾクゾクするような透明感。『スタン・ザ・フラッシャー』冒頭の少女たちの群れをとらえた蒼い画面はまさに、「ロリータ」の魅力、直球。ヒラヒラとした風に人生をさらわれそうな予感を感じてしまう。忘れていた「男を狂わせる」という存在感だ！日本のエッチ写真雑誌にもかわいい少女が増えているが、この映画のナターシャとどこかが違う。ナターシャは媚びてないのである。媚びるなど考えもしない脳ミソの無意識状態なのだ。

日本の写真誌やヴィデオに出てる子は、100%媚びているといっていい。(当たり前か、でも)電車に乗っている子にもそんなのが多いぞ。少女オバさん多いぞ。男は彼女たちを好きにはなっても、狂いはしないのです。

ロリータの本当のスゴさは、ちょっとした日常のしぐさの美しさから、彼女たちの無意識の淵にひきずりこみそうになることだ。それはポルノチックな香りをまったくさせないのに、世界を裏返すようなファナティックな性の香りをさせる。引きずり込まれどころが悪ければ、チンポ出しおじさんにさえなってしまうような、魔性。しかして、原因を与えた彼女たちは無邪気にもケーキなどを食っていたりする。

ゲンスブールは、まだ性欲の目覚めがないような少女への狂気の偏愛を、通俗的な半分娼婦的「マショーの少女」を使わず、どシャープに描いてみせた。それは、シャルロットの父である彼でなくてはなしえなかった、遺言にも似た、聖なるフレンチ・ロリータの解剖図だったのだ。

COMMENTS

"バンッ"とスタンが薄暗い青い部屋で引き金を引いた時、私の胸に穴が開いてしまった。小さくて深い穴。ゲンスブール。ゲンスブール。この映画を観終わった後の頭の中はまったくからっぽで、それを言葉で表すのは不可能だ。
――**カヒミ・カリィ**

女子校に通っていた頃、露出狂の男の人を何度も見かけた。彼らは皆スタンであり、幼い少女達から離れる事も、そして触れる事もできない最も安全な男なのかもしれない。
――**ネロリーズ　KAZMI**

パリにいた頃、私の前に何度か、"フラッシャー"たちが現れた事を思いだした。彼らはどこか憶病で自由になれない絶望の表現をしている。ずっと青の中に沈んでいるstanは私を悲しくさせた。
――**MANNA**

おじさん達は問題をたくさん抱えている。ゲンスブールの遺作となったこの作品に貫かれているおじさんの苦悩は悲劇と滑稽という相反する味付けをされた美しい映画だ。
――**少年ナイフ　中谷美智枝**

何故か似ているな！（趣味…が）『ジュテーム…』を見てゲンスブールの女の人の趣味がいいと思った。そして『スタン…』を見て女の人の趣味がすごいと確信した。ナターシャは、久びさに見る白いブラウスの似合う美少女。映画の冒頭、白いブラウスの少女達…を見て…この映画…そしてゲンスブールを確信した。――**中野裕通**

何故、美少女ナターシャが、堕落した中年男と共存しているのか？幾度となく繰り返されるゲンスブールのメロディーに誘惑されながら解き明かされてゆくよろこび。
――**緒川たまき**

十数年前、和製スタンおじさんを怖いと思った。もうロリータと呼ばれる頃を過ぎ、この映画を観てスタンおじさんをカワイイと思った。どんな変質者だろうと夫は夫。「ナターシャ、アンタの美しさは罪よっ！」
――**モダンチョキチョキズ　濱田マリ**

un film de
SERGE GAINSBOURG

"stan the flasher"

《日本初公演・プレミアショー》
&
ゲンスブール委員会スペシャルトークショー

◆特別ゲスト：あがた森魚 ◆聞き手：嶽本野ばら

9月15日㈷PM8:40よりトークショー&プレミア上映！

- ●あがた森魚・トーク PM8:40より
- ●映画上映 PM9:10より（終映10:20）
- ●料金：当日券のみ1,700円均一
(但し、パラダイスシネマ、RCS会員は1,300円)
- ●会場：心斎橋・アメリカ村・Big Step4F

パラダイス・シネマ

●お問合せ：06-282-1460

京都 では、9月19日㈫PM9:10より
みなみ会館（九条大宮・近鉄東寺駅西）にて
〈但し、京都では映画上映のみとなります〉
●お問合せ：075-315-7281（RCS）

●「ゲンスブール・トリビュート '95
〜ゲンスブールに捧げる俺の女たち〜」
(コロムビア・レコード)好評発売中！
●今秋、「ゲンスブール・ナイトVOL.2」決行！
●近日、「スローガン」
(ゲンスブール&バーキン初共演作！)
レイトロードショー決定！